

群馬県前橋市

西大室上縄引遺跡Ⅱ

—変電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

前橋市教育委員会
東京電力パワーグリッド株式会社
山下工業株式会社

群馬県前橋市

西大室上縄引遺跡Ⅱ

—変電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

前橋市教育委員会
東京電力パワーグリッド株式会社
山下工業株式会社

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、國府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が籠をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた鷹橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する西大室上縄引遺跡Ⅱは、大室古墳群に近接し、隣接する上縄引遺跡でも数多くの墳墓や、縄文時代から平安時代に至る集落が確認されており、変電所の建設に伴って発掘調査を行いました。今回の調査では、古墳や周溝墓などの墳墓は確認されませんでしたが、古墳時代の竪穴住居跡と大地震による地割れが確認され、古くから人々が生活した状況をうかがうことができました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年3月

前橋市教育委員会

教育長 塩崎政江

例　言

1. 本書は、東京電力パワーグリッド株式会社（以下「事業者」とする）による変電所建設に伴う西大室上繩引遺跡IIの埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は前橋市教育委員会の指導のもと、事業者から委託を受けた山下工業株式会社（代表取締役 山下尚）が実施し、その費用については事業者が全額負担した。
3. 遺跡所在地　　群馬県前橋市西大室町 2241 番 1
遺跡略称　　1E54
遺跡番号　　前橋市 0230、前橋市 0240
調査面積　　300m²
期間【現地調査】　　令和元年10月15日～令和元年11月 2日
【整理作業】　　令和元年11月 3日～令和2年 2月29日
調査担当者　　青木 利文（山下工業株式会社 文化財事業部）
調査監督員　　並木 史一（前橋市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係 副主幹）
4. 整理作業及び本書作成は、青木・石塚 久則・川邊 みずき・城 ゆかり・谷藤 龍太郎・福島 祐子（山下工業株式会社）が行った。
5. 遺構図作成は、田中隆明（タナカ設計）が行った。
6. 写真は、遺構を青木が、遺物を城が撮影し、航空撮影は高橋 純（J・T空撮）が行った。
7. 本書の執筆については、第I章を並木が、第II・V章を石塚が、第III章を青木が、第IV章を城が行った。
8. 本書の挿図・図版作成は、青木・石塚・城・谷藤が行った。
9. 石器の実測・撮影は山崎 芳春（文化財整理こうけん）が行った。
10. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、前橋市教育委員会 文化財保護課のご指導を得たほか、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）
加部 二生　　原 真　　前原 豊

凡　例

1. 遺跡、全体図におけるX・Y値は、平面直角座標IX系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
2. 本報告書で用いる座標値は、全て世界測地系測地成果 2011 である。
3. 遺物注記で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。
【堅穴建物】・・H　【土坑】・・D　【ビット】・・P　【溝】・・W　【地割れ】・・X
4. 本書掲載の第1・2図は前橋市発行の1/2,500「前橋市地形図」、第3図は国土地理院発行 1/25,000 地形図を用い、一部改変引用した。
5. 本報告書で用いる遺跡図・遺構図・遺物実測図等の縮尺は、すべてにスケールを表示した。
6. 遺物写真是、基本的に実測図と同じスケールを用いた。
7. 土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2011）を用いた。

目 次

はじめに

例言

凡例

目次

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	周辺の遺跡	2
第Ⅲ章	調査の概要	3
第Ⅳ章	確認された遺構と遺物	5
第Ⅴ章	試掘調査	12
第Ⅵ章	まとめ	14

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	西大室上縄引遺跡 II 位置図	1	第 9 図	H - I 出土遺物	9
第 2 図	西大室上縄引遺跡 II 周辺遺跡	2	第 10 図	遺構外 出土遺物	10
第 3 図	西大室上縄引遺跡 II 全体図及び基本順序	4	第 11 図	X - I 平面・断面図及び出土遺物	11
第 4 図	D - I ~ 6 • W - 1 平面図	5	第 12 図	西大室上縄引遺跡 II と 下縄引II遺跡の地割れ	11
第 5 図	H - I 平面・断面図	6	第 13 図	試掘調査の範囲及び出土遺物	12
第 6 図	H - I 断面図	7	第 14 図	赤井戸式土器の分布図	13
第 7 図	H - I カマド 平面・断面図	7	第 15 図	上縄引遺跡群と下縄引遺跡群の 地形と遺構の分布	14
第 8 図	H - I 掘方、P 7 • 9 • 10 平面・断面図及び出土遺物	8			

挿表目次

第 1 表	作業経過	3	第 5 表	遺構外 出土遺物観察表	10
第 2 表	D - I ~ 6 • W - 1 計測表	5	第 6 表	X - I 出土遺物観察表	11
第 3 表	H - I ピット計測表	8	第 7 表	試掘調査 出土遺物観察表	12
第 4 表	H - I 出土遺物観察表	9			

写真図版目次

図版 1	1. 調査区と大室公園 北から 2. 調査区全景 上が北	図版 4	出土遺物 (H - I, X - I)
図版 2	1. 遺構確認状況 2. D - I ~ 4 • W - 1 完掘 3. H - I 完掘 南から 4. H - I 地割れ 南から	図版 5	出土遺物 (遺構外、試掘調査)
図版 3	1. H - I 遺物出土状況 西から 2. H - I カマド・遺物出土状況 西から 3. H - I P I (貯蔵穴) 完掘 西から 4. H - I 掘方 西から 5. 地割れ 北から 6. 地割れ 南壁 7. 試掘調査 1 トレンチ掘削状況 東から 8. 試掘調査 遺物出土状況 南から		

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成 30 年度に開発事業者である東京電力パワーグリッド株式会社（以下「開発者」という）より、西大室町地内での変電所建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて事前の相談を受けた。前橋市教育委員会（以下「市教委」という）は、隣接地における昭和 55 年の土地改良事業に伴う発掘調査（西大室遺跡群 II 上縄引遺跡）において多数の遺構が確認されていることから、事前に試掘確認調査を実施し、その取扱いについて協議したいと回答する。平成 30 年 11 月 15 日、開発者から試掘確認調査依頼が提出され、これを受け平成 31 年 3 月 5 日、試掘確認調査を実施した結果、竪穴住居跡等を検出した。工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

令和元年 7 月 9 日付で開発者から市教委へ埋蔵文化財発掘調査依頼が提出された。市教委直営による発掘調査は、他事業で実施中であるため困難であると判断し、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、市教委の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することで合意した。令和元年 9 月 24 日付けで開発者と民間調査組織である山下工業株式会社の間で発掘調査・整理業務委託の契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定が締結され、同年 10 月 15 日から現地調査が開始された。

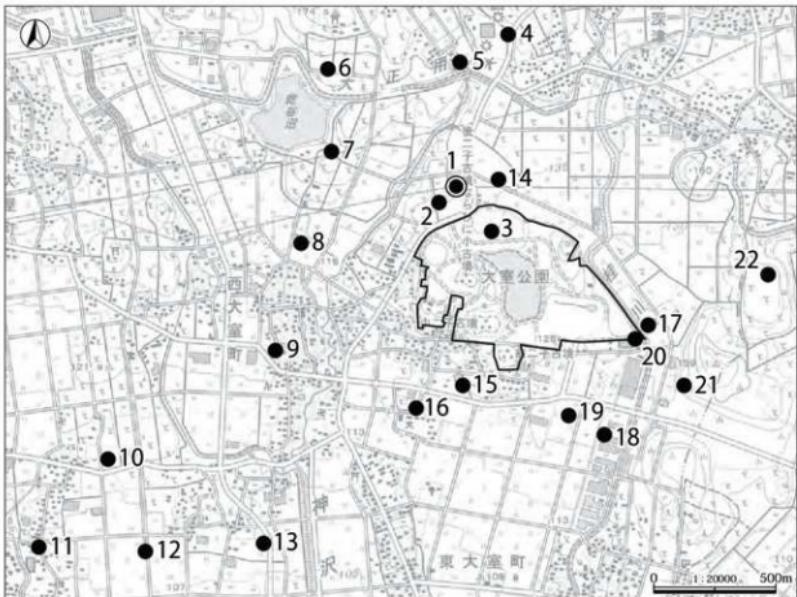
なお、遺跡名称「西大室上縄引遺跡 II」（遺跡コード：IE54）の「西大室」は町名、「上縄引」は旧小字名を採用し、「II」は過年に実施した調査と区別するために付したものである。



第1図 西大室上縄引遺跡 II 位置図

第Ⅱ章 周辺の遺跡

西大室上縄引遺跡Ⅱ（1）は今回の調査地点である。上縄引遺跡（西大室遺跡群Ⅱ）（2）は古墳時代前期の大規模な周溝墓群である。内堀遺跡群（3）は大室古墳群を中心とした37haに及ぶ大規模な遺跡群で、旧石器・繩文・古墳時代前期の大規模集落、4基からなる古墳時代後期の前方後円墳と小型の古墳群で構成されている。西原遺跡（4）は古墳時代前期の集落である。三ヶ戸西遺跡（5）は東日本を代表する飛鳥時代の製鉄遺跡である。七ツ石遺跡（6）は繩文時代早期の住居と6～7世紀にかけての古墳群である。北山遺跡（7）は繩文時代・古墳時代前期集落と、9基からなる周溝墓、古墳時代後期～奈良・平安時代集落が調査されている。大室元城（8）は中世、大室城（9）は戦国期の城址と考えられている。荒砥富士山古墳（10）は古墳時代末期の円墳、舞台遺跡1号墳（11）は大量の石製模造品を出土した帆立貝式古墳である。西大室丸山遺跡（12）は古墳時代中期の巨石祭祀に伴う土師器と石製模造品が出土している。荒砥東原遺跡（13）は奈良～平安時代の集落である。下縄引1遺跡（14）は古墳時代前期の集落である。荒砥上諏訪遺跡（15）では古墳時代後期の円墳が調査されている。大室小学校校庭遺跡（16）は古墳～平安時代の集落である。久保賀戸遺跡（17）は古墳時代前期～奈良・平安時代の集落である。荒砥上川久保遺跡（18）は古墳時代前期～後期・奈良・平安時代の集落と、古墳時代前期の周溝墓が出土している。荒砥五反田遺跡（19）は古墳時代と平安時代の集落が調査されている。梅木遺跡（20）は古墳時代前期～中期の集落と古墳時代前期の周溝墓、古墳時代中期の豪族居館が調査されている。多田山遺跡（21）では古墳時代後期～終末期の古墳群が調査されている。そのうちの多田山12号墳からは、唐三彩の陶枕が出土している。赤瓶茶臼山古墳（22）は5世紀中葉の墳長98mを測る帆立貝式古墳で、続く6世紀には三世代にわたり継続する大室古墳群の前方後円墳が築造されることとなる。



第2図 西大室上縄引遺跡Ⅱ 周辺遺跡

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

本遺跡地は、変電所建設工事のため調査が行われた。開発面積は 1976.22m²であるが、試掘調査により遺構の集中している 300m²が調査の対象となった。調査区は南北が約 18m、東西が約 16m の長方形となっている。

遺構調査は、I 層(現耕作土)～V 層までをバックホウにより除去し、ローム層上面の VI 層が遺構確認面となる。遺構確認は人力で行った。試掘により把握されていた竪穴建物(本調査、H - 1)は東壁際で確認されたが、遺構の東部が調査区外となり全体が把握できなかった。このため調査区を東に拡張し遺構全体を確認した。竪穴建物(H - 1)の南西部は大きなカクランにより壊されており、カクラン部を掘削して竪穴建物の断面を確認した。その結果、竪穴建物は地割れ(X - 1)により壊された遺構と判明した。このほかの遺構としては、土坑や溝なども確認できた。遺構掘削はジョレンやスコップ、移植ごてを用い、半裁やベルトを残して掘削を進めた。

測量に用いた座標系は世界測地系で、X=43760、Y=-57356 を起点とし、南東に展開する 4m のグリッドを設定した。遺構記録は、平面図・断面図はトータルステーションと電子平板を用い作成した。遺構写真は 35mm モノクロ、カラー・ポジフィルム、およびデジタルカメラを使用した。遺構掘削後には、航空写真撮影を行い全景の記録を行った。

2. 調査の経過

調査は令和元年 10 月 15 日～同年 11 月 2 日まで実施した。詳細は下記の表に示した。

第1表 作業経過

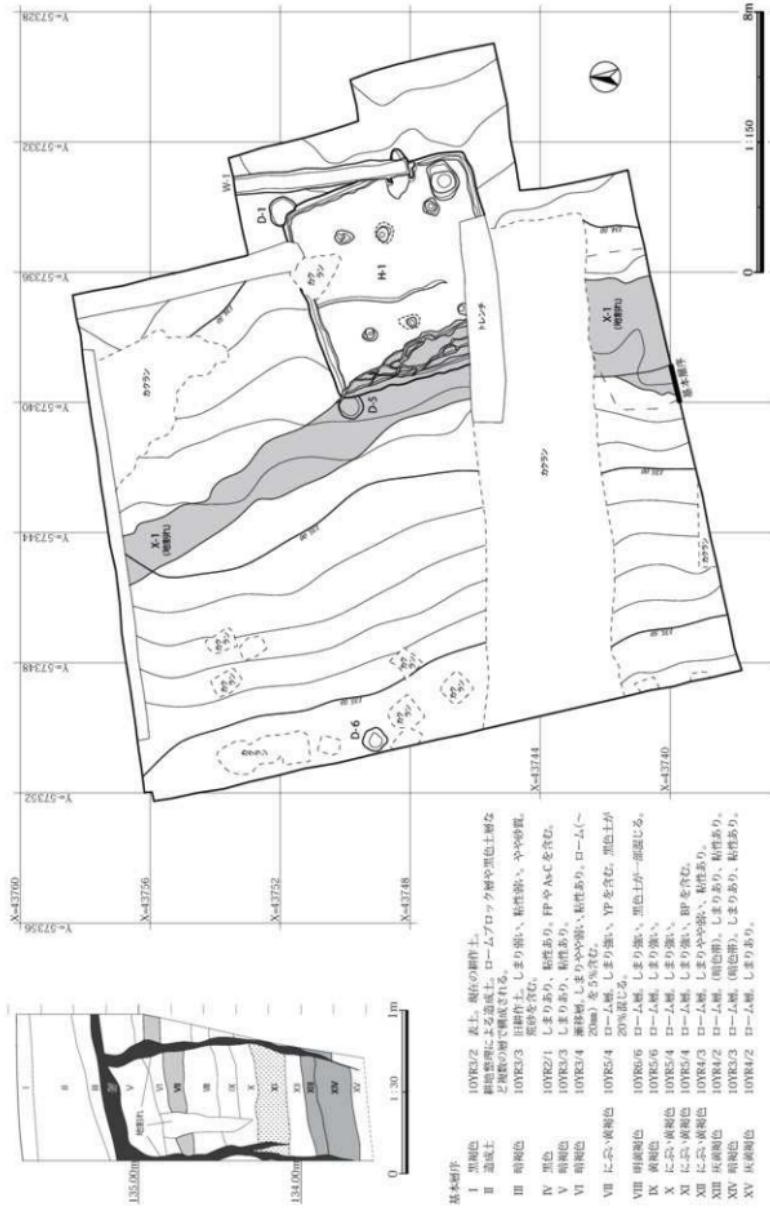
作業内容	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2
調査区設定	■																			
表土掘削		■																		
遺構確認			■																	
遺構掘削				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
遺構記録					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
清掃・全景撮影						■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
完了立会い																		■		
跡片付け																		■	■	
埋め戻し復旧																		■	■	

3. 基本層序

本遺跡はローム層の上面が遺構確認面で、西から東にやや強く傾斜し、最大で 150cm 程の高低差となる。高い位置の調査区西部では表土が薄く、30cm 程で確認面となる。このため、確認面には複数の建設機械の痕跡が残っている。一方、東部は表土のほか、昭和 50 年代に行われた耕地整理の造成土やそれ以前の旧耕作土が残っており、確認面までは最大で 80cm 程となる。また、調査区の中央を南北に走行する地割れ(X - 1)を境に、東部は地山が 50 ~ 60cm 程ずり下がっている(第 11 図)。

I 層は現在の耕作土、II 層は昭和 50 年代に行われた耕地整理の造成土とみられ、複数の乱れた層の堆積となるが、これをまとめて本層とした。III 層は旧耕作土で、これに類似する土坑からは近・現代の遺物が確認されている。遺構確認面はローム層上面となる VI 層だが、竪穴建物(H - 1)と地割れ(X - 1)の断面(第 11 図)を見ると、V 層の上面が本来の確認面であった可能性がある。VI 層以下はローム層となり、上層に近い VII 層は YP、中位にある XI 層が BP に相当し、XIII 層と XIV 層は暗色帶に相当するものとみられる。

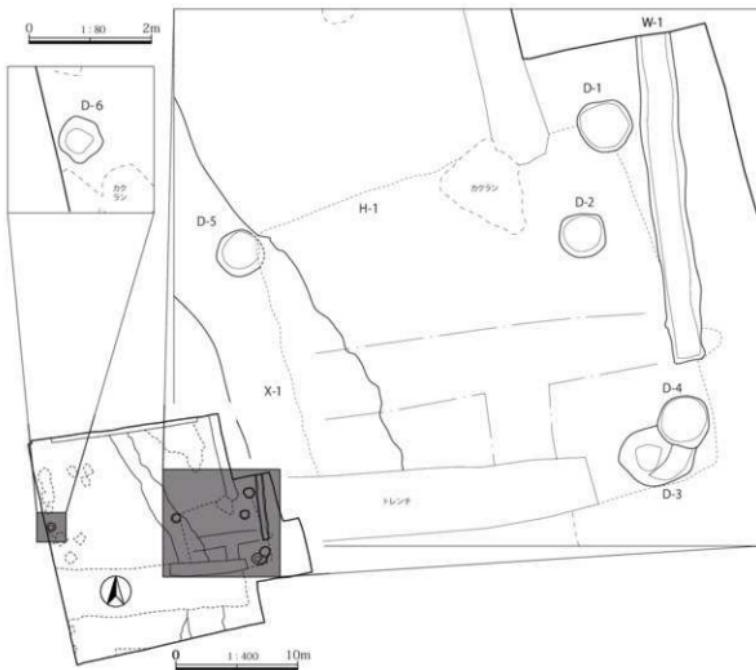
第3図 西大学上縄引遺跡II 全体図及び基本断面



第IV章 確認された遺構と遺物

土坑・溝

土坑は6基、溝は1条が確認された。D-1～5とW-1は覆土がⅢ層に類似しており、出土遺物に近代の陶器片や食用の貝の殻などが含まれていることから、近・現代の遺構と考えられる。なお、D-6には出土遺物がなく、時期は不明である。D-1～5とW-1は、H-1と重複している。



第4図 D-1～6・W-1 平面図

第2表 D-1～6・W-1 計測表

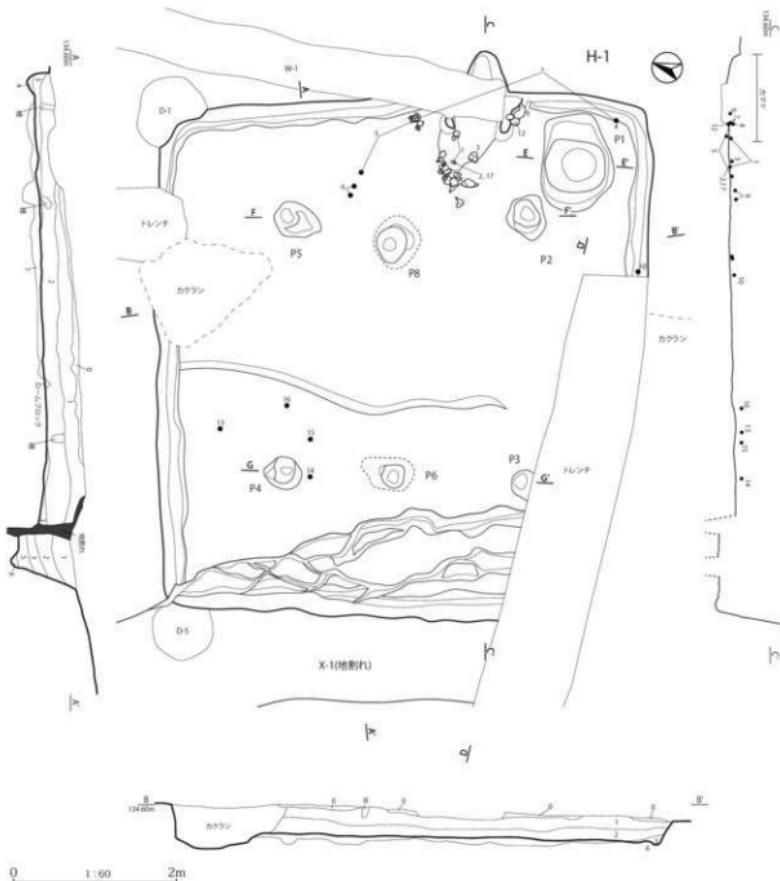
	長軸(cm)	短軸(cm)	上端標高(m)	深度(cm)	断面形状	備考
D-1	91	80	134.38	20	不整形	覆土はⅢ層に類似する。遺物は貝の殻・釘など。H-1より新しい。
D-2	79	77	134.44	10.5	楕円形	覆土はⅢ層に類似する。遺物は土器の小片など。H-1より新しい。
D-3	129	96	134.43	23	楕型	覆土はⅢ層に類似する。遺物は近代の陶器片・土師器の小片など。H-1より新しい。
D-4	88	84	134.36	23	箱型	覆土はⅢ層に類似する。遺物なし。H-1より新しい。
D-5	77	72	134.79	27	楕型	覆土はⅢ層に類似する。遺物は近代の陶器片など。H-1より新しい。
D-6	76	71	135.68	12	不整形	覆土は粘土質土。白色粉を7%、ロームを10%含む。遺物なし。

	長さ(cm)	幅(cm)	上端標高(m)	深度(cm)	断面形状	備考
W-1	長さ(540)	幅62	134.31	36	箱型	覆土はⅢ層に類似する。遺物は近代のプラスチック片・土師器の小片など。H-1より新しい。 ()は残存値

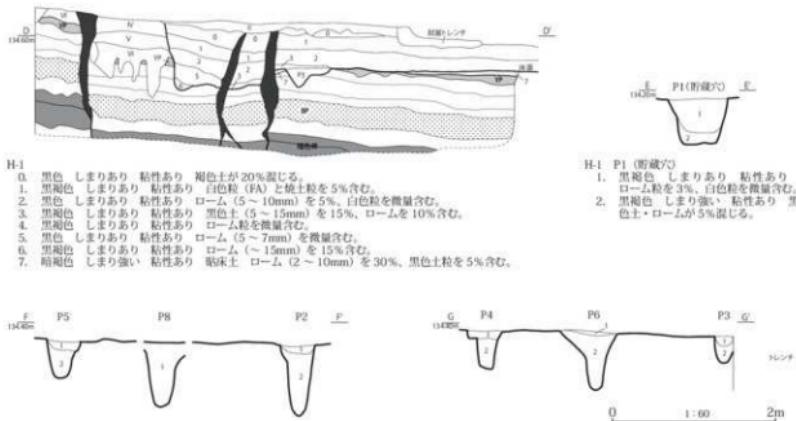
H - 1

本遺構は東にカマドを持つ竪穴建物である。主軸は N-85° E で、規模は南北が 6.1m、東西が 6.3m となる。遺構は傾斜地にあり、深度は西部で 77cm、東部のカマド周辺で 24.5cm である。また、遺構の南西部はカグランによって大きく壊されている。さらに西辺一帯は、X - 1（地割れ）により陥没している。

カマドは遺構の東壁南寄りに付設されている。左袖と焚口部は W - 1 に切られていたため完全な形での確認はできていないが、全長は 110cm、焚口部は 58cm である。袖は粘土で構築されている。焚口部には焼土が広がる。床面は貼り床があり、壁周溝がめぐっている。貯蔵穴はカマドの南にある P 1 となる。柱穴は P 2 ~ 6 と P 8 の 6 基が想定される。その他、P 7・9・10 は貼り床の下から確認されている。出土遺物は、カマド周辺で多数出土しており、土師器の壺や長胴甕、小型甕、白玉などがある。時期は、遺物の特徴から 6 世紀後半～7 世紀初め頃の遺構であると考えられる。

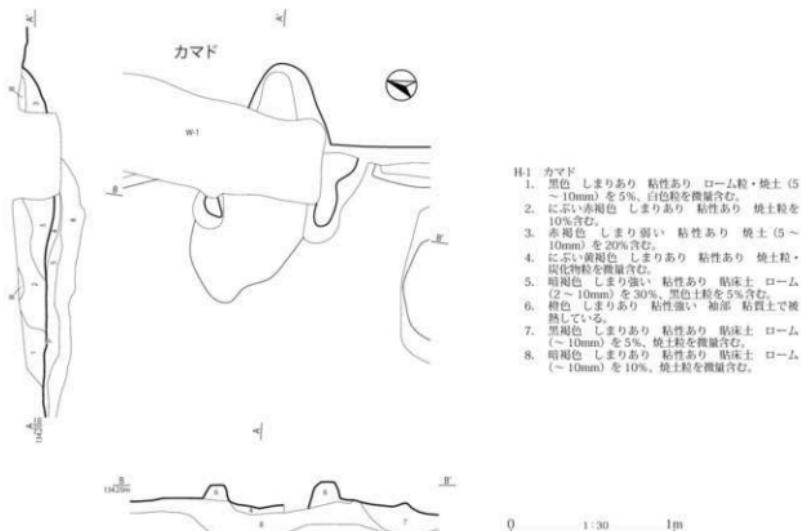


第5図 H - 1 平面・断面図

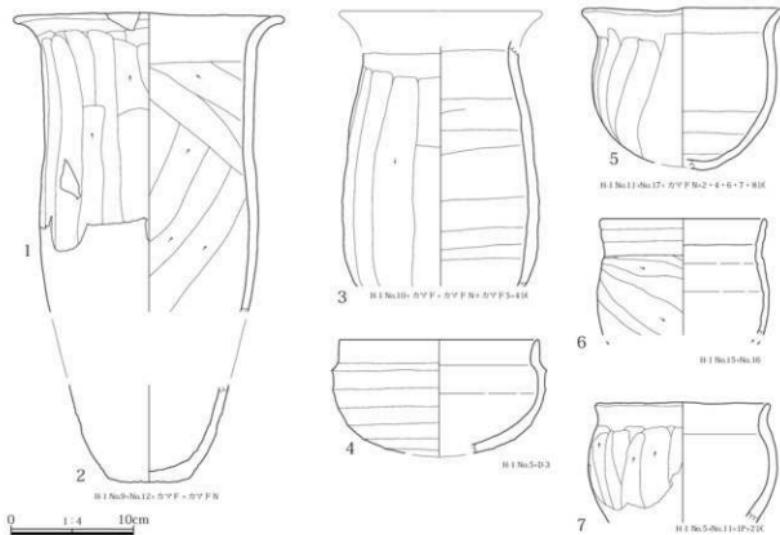
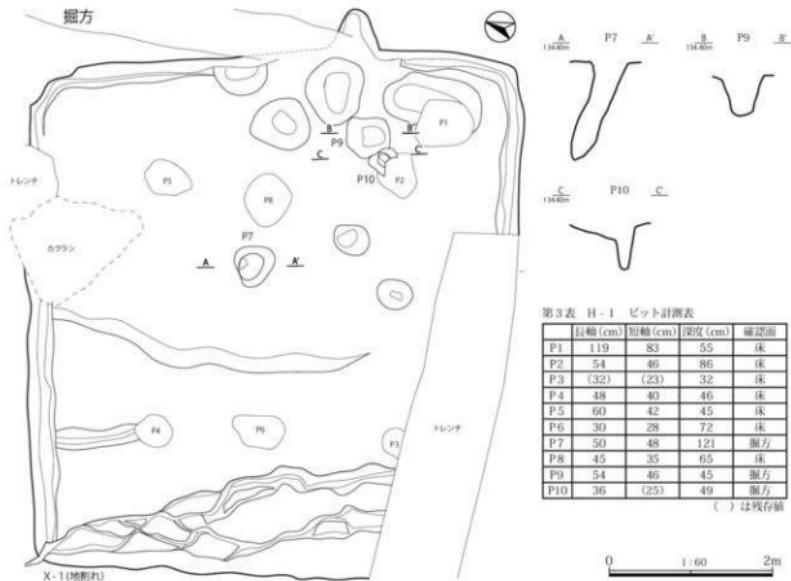


- H-1 P5**
 1. 黑褐色 しまりあり 粘性あり ローム粒を10%、焼土粒を微量含む。
 2. 黑褐色 しまり弱い 粘性あり ローム(5~10mm)を10%含む。
- H-1 P8**
 1. 黑褐色 しまり弱い 粘性あり ローム粒を10%含む。
- H-1 P2**
 1. 黑褐色 しまりあり 粘性あり 烧土粒を10%、ローム粒を微量含む。
 2. 喰褐色 しまり弱い 粘性あり ローム粒を10%含む。
- H-1 P4**
 1. 黑褐色 しまりあり 粘性あり ローム粒を3%、白色粒を微量含む。
 2. にぶい黄褐色 しまり弱い 粘性あり ローム粒を15%、黑色土粒を微量含む。
- H-1 P6**
 1. 黑褐色 しまりあり 粘性あり ローム粒を3%含む。
 2. にぶい黄褐色 しまり弱い 粘性あり ローム粒を15%、黑色土粒を微量含む。
- H-1 P3**
 1. 黑褐色 しまりあり 粘性あり ローム粒を3%、白色粒を微量含む。
 2. にぶい黄褐色 しまり弱い 粘性あり ローム(2~10mm)を15%、黑色土粒を微量含む。

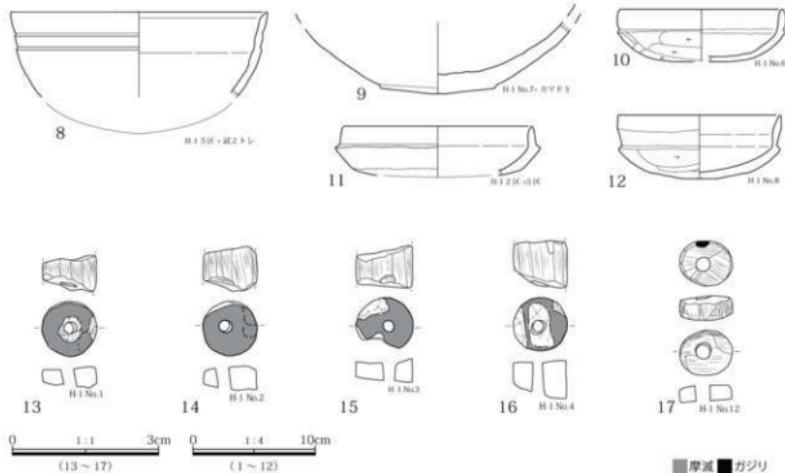
第6図 H-1 断面図



第7図 H-1 カマド 平面・断面図



第8図 H-1 掘方、P 7・9・10 平面・断面図及び出土遺物



第9図 H-1 出土遺物

第4表 H-1 出土遺物観察表

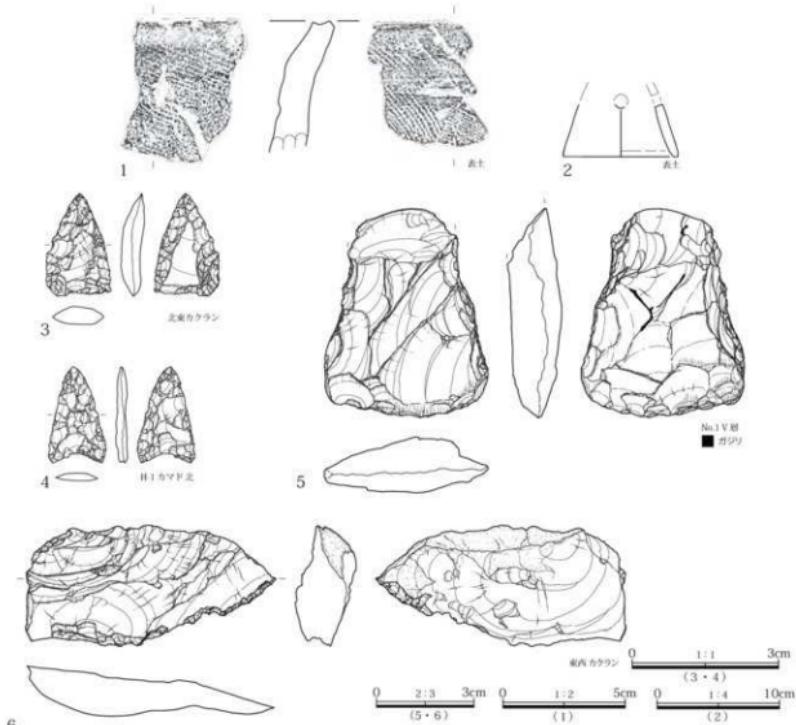
No.	出土	種別	器種	部位	口径・底径・器高	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	カマド	土師器	長胴瓶	口縁～瓶部3/4	22.2・…(24.4)	普通	明赤褐色 角閃石	長石・石英 角閃石	外面 胴部底面ハケズリ 斜めヘラナデ	2と同一個体と考えられる。
2	カマド	土師器	長胴瓶	瓶～底部	…・6.3・(9.0)	不良	明赤褐色 角閃石	長石・石英 角閃石	外面 ハケズリ ヘラナデ	表面は激しく摩滅。
3	カマド	土師器	長胴瓶	底部2/3	…・…・(20.0)	良好	に赤い 褐色	良好 長石・石英・角閃石	外面 胴部底面ハケズリ 斜めヘラナデ	内面は輪縮痕が目立つ。混和材が多く、全体的に粗い製作。
4	床	土師器	环	1/4	(16.4)・…・(9.3)	良好	褐色	角閃石	外面 ハケズリ 内面指ナデ	
5	床	土師器	小型瓶	3/4	16.2・…・13.3	普通	に赤い 褐色	長石・石英 角閃石	外面 胴部底面ハケズリ 内面横ヘラナデ	内面黒色。一部にコゲ付着。
6	床	土師器	小型瓶	口縁～瓶部	13.2・…・(9.6)	良好	浅黄褐色	長石・石英 角閃石	外面 斜めヘラナデ 内面 ヘラナデ	
7	床	土師器	小型瓶	口縁部1/3	(14.0)・…・(9.9)	普通	褐色	長石・石英 角閃石	外面 胴部底面ハケズリ 内面 ヘラナデ	
8	覆土	土師器	跡	口縁部 1/4	(20.8)・…・(7.0)	良好	に赤い 褐色	良好 角閃石	外面 胴部ハケズリ 内面 指ナデ	後二子古墳(6世紀後半)の出土品に類似。
9	カマド	土師器	壺	底部	…・10.0・(5.9)	良好	浅黄褐色	良好 長石・石英 角閃石	外面 ハラナデ 内面 指ナデ	混和材が多い。
10	床	土師器	环	1/2	13.4・…・4.3	良好	に赤い 黄褐色	長石・石英 角閃石	外面 直線的なハケズリ 内面 指ナデ	内面は黒色。
11	覆土	土師器	环	口縁～底 部1/6	(15.4)・…・(4.0)	普通	に赤い 黄褐色	長石・石英 角閃石	外面 体部底面ハケズリ 内面 指ナデ	内外面ともに黒色。
12	カマド	土師器	环	ほぼ完形	13.2・…・5.2	良好	褐色	良好 長石・角閃石	外面 ハケズリ 内面 指ナデ	底部に赤色唐彩か?

No.	出土	種別	器種	石材	直径・厚さ・孔径 (mm)・重量 (g)	形態・特徴
13	床	石製品	白玉	滑石	11.0・4.0・2.5・1.24	側面はすり加工、小口は摩滅。
14	床	石製品	白玉	滑石	11.0・5.0・2.5・1.76	側面はすり加工、小口は摩滅。
15	床	石製品	白玉	滑石	11.5・4.5・2.0・1.47	側面はすり加工、小口は摩滅。
16	床	石製品	白玉	滑石	11.0・7.5・2.0・1.98	側面はすり加工、小口は摩滅。
17	床	石製品	白玉	滑石	10.5・3.0・3.0・0.66	小口はすり加工。

() は残存部、() は推定値

遺構外より出土した遺物

遺構外出土遺物は古墳時代の土師器や埴輪のほか、縄文時代の石器が確認された。今回の調査では古墳や縄文時代の遺構はなかったが、周辺に存在する可能性がある。4はH-1(古墳時代)からの出土であるが、混入遺物とし遺構外出土遺物とした。



第10図 遺構外 出土遺物

第5表 遺構外 出土遺物觀察表

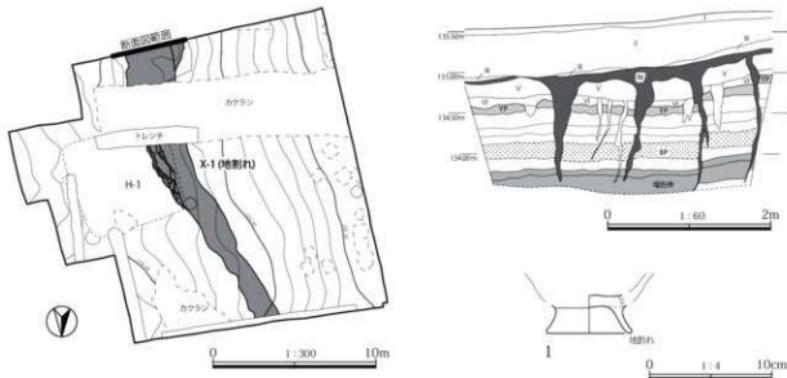
No.	出土 種別	器種	部位	LJ種 ・底径・器高	焼成	色調	胎土	整形	備考
1	表土	单輪	円筒埴輪	L脚部片 — × — (5.4)	良好	浅黄褐色 黑色斑	良好 黑色斑	外面部 内面部	断面は黒灰色。周辺露頭からの張入か。
2	表土	土師器	器台	脚部 1/3 — × (9.4) × (4.3)	良好	にぶい 粗面	良好。長石 閃閃石・赤鉄 鉄分	外面部 内面部	断面ハラミガニ 付テ 透孔。時期不明。

No.	出土	種別	器種	石材	長さ・幅・厚さ（mm）・重量（g）	形態・特徴
3	カクラン	石器	石鑿	貝質頁岩	21.0・13.0・5.0・1.08	平基石鑿。
4	H-1	石器	石鑿	チャート	20.0・11.5・2.5・0.45	凹基石鑿。
5	確認面	石器	石斧	黒色頁岩	64.0・50.0・16.5・47.99	柄部が欠損し形状は不明瞭だが握型。刃部は摩耗する。
6	カクラン	石器	スクリュー	チャート バー	37.0・77.0・19.0・33.09	素材削片末端に連續的な二次加工を施す。

() は残存値、() は推定値

X - 1 (地割れ)

X - 1は調査区の中央部を南北に走行する地割れである。中央部では、H - 1の西辺を壊している。H - 1が6世紀後半～7世紀初め頃の遺構と考えられるため、この地割れはそれ以降に生じたものである。本遺跡周辺では、内堀遺跡群内の下縄引II遺跡などで地割れが確認されており、この点からX - 1は弘仁9（818）年の地震に由来するものと考えられる。なお、本地割れの覆土からは10世紀代の須恵器が出土している。



第11図 X - 1 平面図・断面図及び出土遺物

第6表 X - 1 出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	口径・底径・高さ	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	覆土	須恵器	足高	高台部	3/4	一・7.0)・(3.2)	良好	明赤褐色	良好。長石・角閃石	ロクロ形成 貼付焼付。胎土飛化。

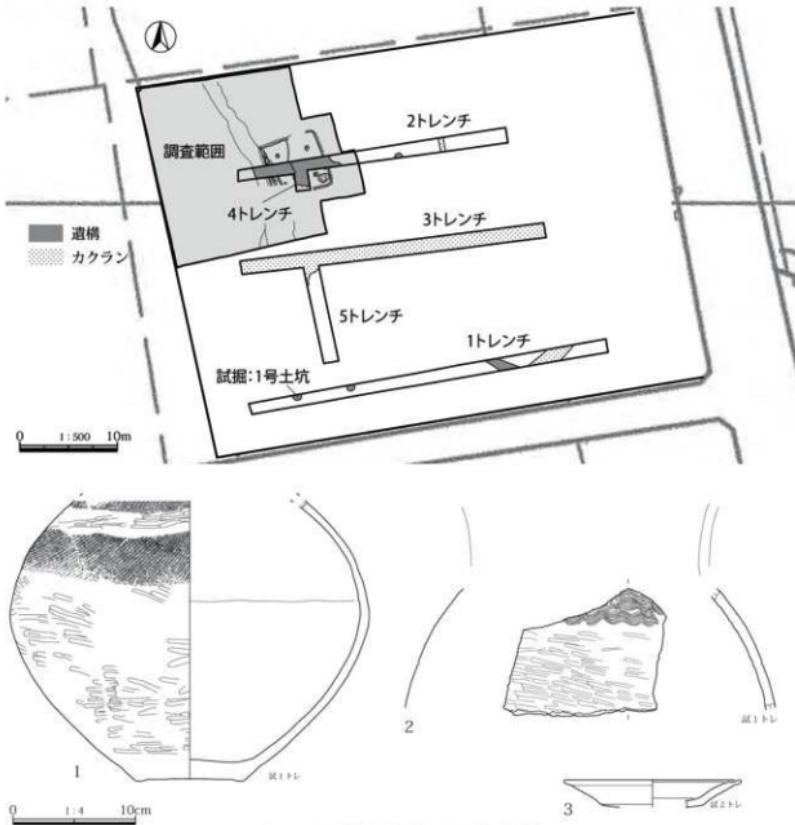
() は残存部、() は推定値



第12図 西大室上縄引遺跡IIと下縄引II遺跡の地割れ

第V章 試掘調査

本調査に先立って、前橋市教育委員会により試掘調査が実施された。試掘調査では5か所のトレンチで遺跡の遺存状態を確認した。結果としては、2・4トレンチでは竪穴建物跡が確認でき、この遺構を対象として本調査区が設定された。一方、1トレンチでは土器が集中する土坑などが確認されたが、遺構の分布は散漫であった。なお、試掘の1・2トレンチで出土した遺物を本章で掲載する。



第13図 試掘調査の範囲及び出土遺物

第7表 試掘調査 出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	口径・底径・高さ	焼成	色調	釉土	調査	備考
1	1トレ 1号土坑	土師器	壺	胴～底部	一・8.8・(23.0)	良好	褐色	良好。長石・ 石英・角閃石	外面 ヘラナデ後ヘラミガ 半 内面 ヘラナデ	外面黒斑あり。縄文は 2条の單列LR。赤井戸式。
2	1トレ	土師器	壺	胴部上半部	一～一・(9.9)	良好	褐色	良好。長石・ 石英・角閃石	外面 ヘラナデ後ヘラミガ 半 内面 ヘラナデ	上部に波状の櫛描文あり。 棒式。
3	2トレ	土師器	壺	L縫部 1/5	(14.8)～・(2.3)	良好	浅黄褐色	良好。長石・ 石英・角閃石	外面 指ナデ 内面 指ナデ	内外面に保て着。

() は残存値、() は推定値

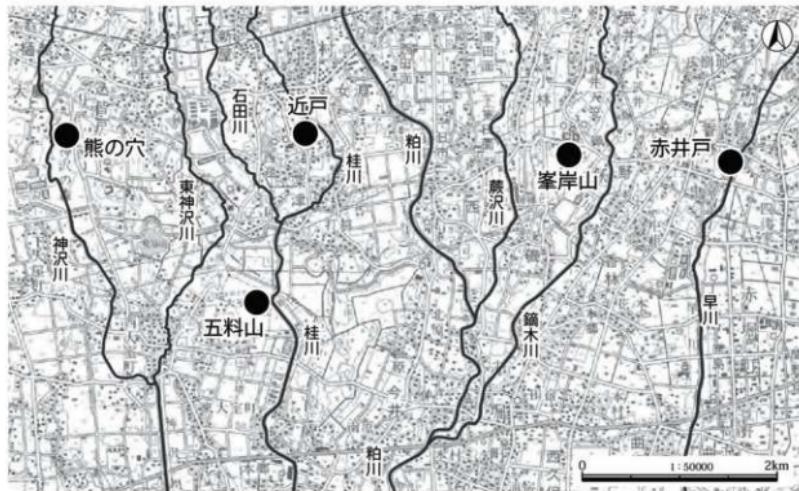
「西大室上縄引遺跡II」出土の赤井戸式土器

西大室上縄引遺跡IIの発掘調査に先立って実施された試掘調査の結果、3点の土器が出土した。1トレンチの1号土坑より、肩部に2段の單節縄文壺型土器が出土した（第13図1）。1トレンチの1号土坑隣接地より、肩部に波状文を施した壺型土器が出土した（第13図2）。3点目は、小型の有段口縄壺型土器の口縁部が出土した（第13図3）。これら3点の土器は赤井戸式を構成する器種である。

この赤井戸式土器に注目したのは周東隆一である。1967年・『考古学ジャーナル』5号「北関東の後期弥生式土器」の論文に掲載した。周東隆一は、山内清男に提案された「縄文」施文土器の終焉という課題に答えるべく、赤城山南麓に分布する類似土器を紹介したが、型式認定にまで踏み込むことに慎重であった。

1975年に蘭田芳雄によって峯岸山遺跡の発掘調査で、赤井戸式土器の集落が検出された（1975年『峯岸山遺跡発掘調査報告書』一次・二次）。1983年には小島純一によって「堤頭遺跡」の発掘調査が実施された。そこで初めて赤井戸式の編年がなされた（『赤井戸式土器について』『人間・遺跡・遺物』）。周東隆一は初出論文から25年後の1991年に、この赤井戸式土器が山内清男によって勧められて始めた経緯とその後の研究史の補遺を、1991年・『唐澤考古』10号「赤井戸文化の追跡」に掲載した。そこでは、赤城山南麓の早川と神沢川に挟まれた5つの遺跡を赤井戸式土器の分布圏（第14図）として示した。

現在赤井戸式土器とは群馬県西部の樽式土器、茨城県の十王台式土器、埼玉県の吉ヶ谷式土器、そしてS字状壺型土器を共伴する東海系土器を主体とする群馬県東部の石田川式土器など、多様な地域の土器が混在することを特徴とする型式を示し、古墳時代前期（庄内・布留式期）の年代が与えられている。西大室上縄引遺跡II出土の3点の土器は、周東隆一が1967年の調査時には五料山遺跡と呼んでいた遺跡に該当する。その後この遺跡は、前橋市教育委員会の学術的な発掘調査がなされ、内堀遺跡群として把握された。その中の下縄引遺跡は古墳時代の住居が200軒近く確認され、そのうちの90軒強の古墳時代前期の住居群が発掘調査されている。上縄引遺跡は古墳時代前期の14基からなる周溝墓群が調査されているが、このことから3点の土器は周溝墓に伴っていたと考えられる。



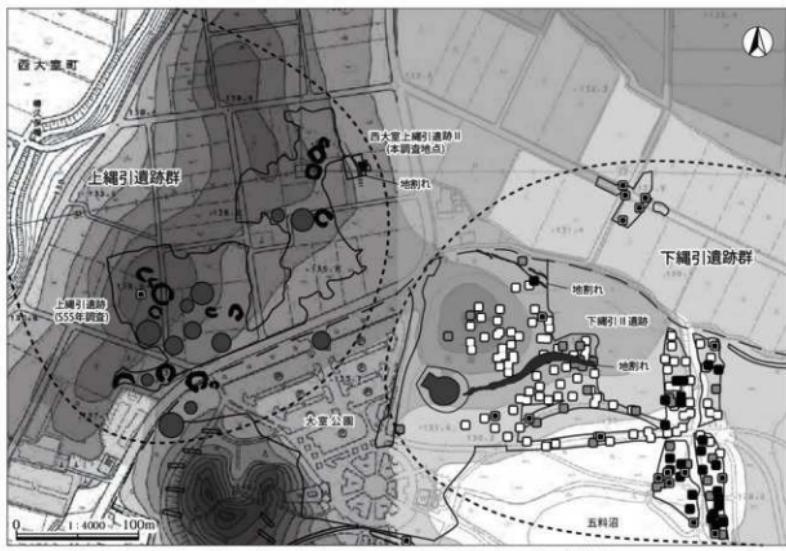
第14図 赤井戸式土器の分布圏

第VI章　まとめ

西大室上縄引遺跡Ⅱは、大室公園の北西に立地する上縄引遺跡群に含まれる遺跡である。本調査では竪穴建物1軒、南北に走行する地割れの痕跡、そして近・現代に属する土坑・溝が確認された。遺構の数は極めて少ないが、地割れに壊された竪穴建物があることが特徴となる。

地割れ（X-1）は南北に走行し、6世紀後半～7世紀初めとなる竪穴建物（H-1）を壊している。H-1では床面および覆土が破壊されていることから、竪穴建物が埋没後に発生したものとなる。このような地割れは南東にある下縄引Ⅱ遺跡でも確認されており、およそ弘仁9（818）年の地震の影響とみられる。これら地割れの特徴としては、丘陵地の裾付近にあり、等高線に沿って発生している。なお、本遺跡では地盤がずり下がり、段差となっている。

竪穴建物は1軒が確認されたが、本遺跡を含む上縄引遺跡群は古墳時代前期の周溝墓や6～7世紀の古墳などからなる墓域と想定される地帯であり、竪穴建物は本遺跡を含めわずか2軒である。一方、集落は南東に位置する下縄引Ⅱ遺跡があり、4世紀中ごろから6世紀後半代が中心で、この間に該当する145軒の竪穴建物が確認されている。集落の分布は、4世紀代の集落は標高の高い丘陵部にあるが、5～6世紀代になると現在の五料沼周辺の低地部に移っている（内堀遺跡群 XI 1999）。この点からみると、本遺跡で確認された竪穴建物（6世紀後半～7世紀初め頃）は、同時代の下縄引Ⅱ遺跡の集落と離れた場所にある。また、墓域となる上縄引遺跡群の丘陵地にある点では、集落の竪穴建物とは一線を画す特殊な目的を持った竪穴建物と考えられる。



第15図 上縄引遺跡群と下縄引遺跡群の地形と遺構の分布

写真図版



1. 調査区と大室公園 北から



2. 調査区全景 上が北



1. 遺構確認状況



2. D - 1 ~ 4 • W - 1 完掘



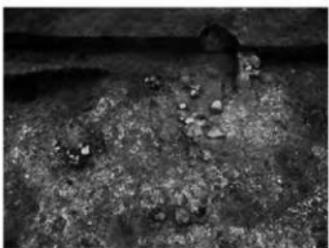
3. H - 1 完掘 南から



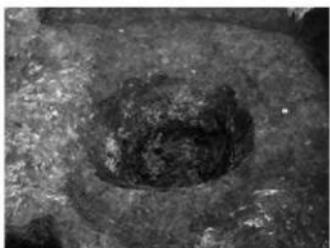
4. H - 1 地割れ 南から



1. H - 1 遺物出土状況 西から



2. H - 1 カマド・遺物出土状況 西から



3. H - 1 P 1 (貯蔵穴) 完掘 西から



4. H - 1 掘方 西から



5. 地割れ 北から



6. 地割れ 南壁

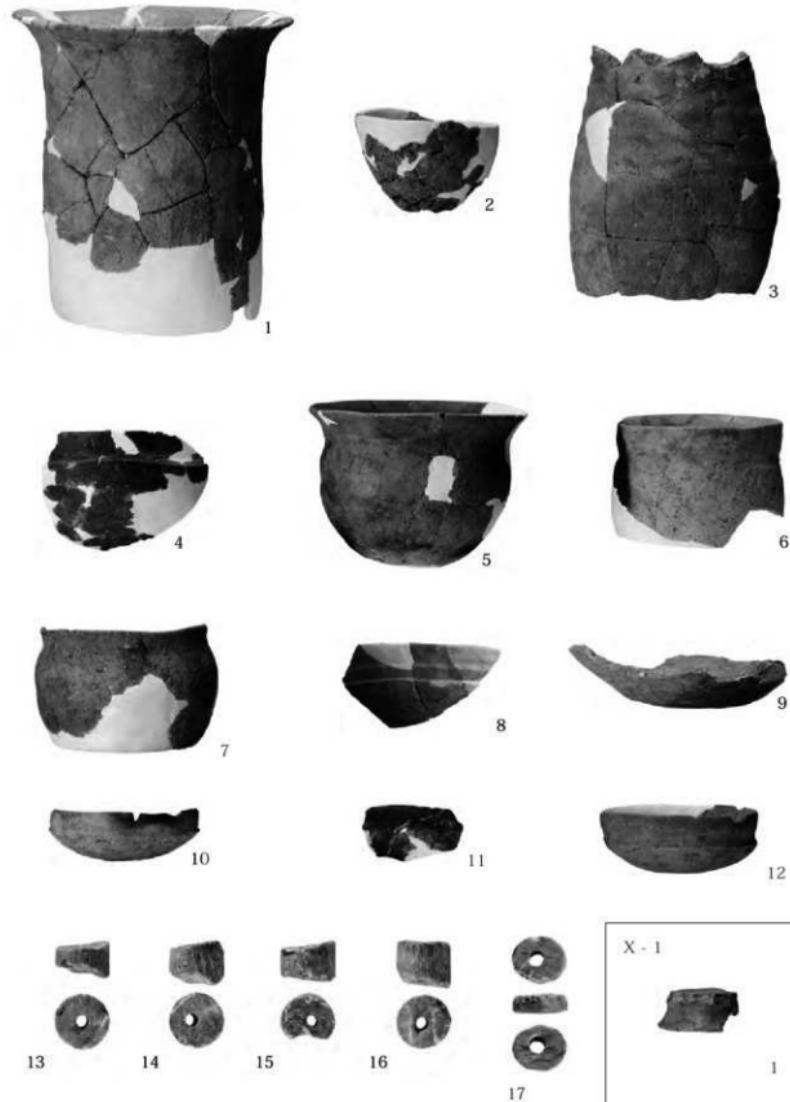


7. 試掘調査 1 トレンチ掘削状況 東から



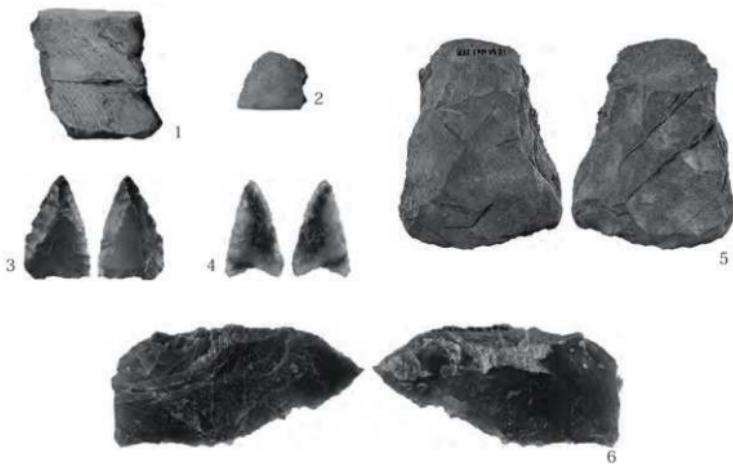
8. 試掘調査 遺物出土状況 南から

H-1

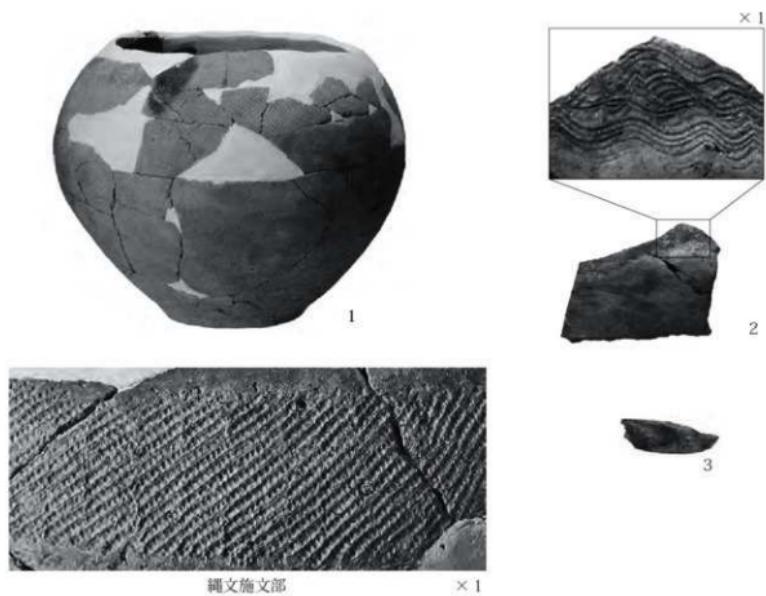


出土遺物 (H - 1、X - 1)

遺構外出土遺物



試掘調査



出土遺物（遺構外、試掘調査）

報告書抄録

ふりがな	にしおむろかみなわびきいせきに						
書名	西大室上縄引遺跡Ⅱ						
副書名	変電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
編著者名	青木利文・石塚久則・城ゆかり・谷藤龍太郎・並木史一						
編集機関	山下工業株式会社 〒 371-0244 群馬県前橋市麻毛石町 207-8						
発行機関	前橋市教育委員会 文化財保護課						
発行年月日	2020年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村					
西大室上縄引遺跡Ⅱ	群馬県前橋市西大室町 2241番1	0230 10201	0240 36°23'33" (IE54)	139°11'38"	2019.10.15 ~ 2019.11.2	300m ²	変電所建設
所収遺跡	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西大室上縄引遺跡Ⅱ	古墳時代 前期	土坑など	壺		試掘トレンチで確認された。		
	古墳時代 後期	竪穴建物	土師器 壺・甕		後の地割れにより壊される。		
	平安時代	地割れ	須恵器		弘仁9(818)年の地震による地割れ。		
	近・現代	土坑溝	陶器片				

西大室上縄引遺跡Ⅱ

—変電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020年 3月25日 印刷

2020年 3月31日 発行

編集 山下工業株式会社
発行 前橋市教育委員会
印刷 朝日印刷工業株式会社
